

扶桑皇統記圖會
後編
三

遠13
2472
10



門入遠 3
2472
10

扶桑皇統記圖會後編卷之三目錄

浅山過入隱室遭危難

惡僧伏刑浅山玉月雲條

无頼の惡僧隱室と見らる浅山と擒ふる圖

釋空海幼稚奇行

阿波大滝生佐室奇苦行夏

室戸の菴室の惡龍現下空海と試むる圖

空海師入唐求法

以五筆書詩水上題詩條

文珠童子小現と空海小奇瑞と見せしめりる圖

三卷三目録

空海師歸朝鎮難風

投筆并隔漢書額條

東大寺蜂怪南圓堂建立

高野山開発伽藍建立

清滝川と隔て空海額の文字と書圖

東寺賜法海西寺賜守敏

空海守敏法方優劣條

嵯峨天皇御即位

守敏空海祈雨争法方條

女人禁制と犯して空海の母種との怪異小の圖

母公阿刀氏望登高野山

山中怪異慈尊院の條終

扶桑皇統記圖會後編卷之三

浪華好華堂野亭参考

浅山過入隱室遭危難

惡僧伏刑浅山書雲條

任僧清眞の適意情をうけて召使ひ玄吾が物給小勤学の望あるよしと

それハ易れ吏かり當院へも禁官の儒先生より来りりむ何きの儒家の門

生ふるも心任せかり先聖書の如く我教道得ざるを寺勢の暇

ある折ハ素續の指南に多小玄吾好む道もれ。昼夜を捨ど勿と字が

多る程小生質記憶よく秀才の玄吾更追々学業進々清真も感んて或儒

官小頼と玄吾と入門を多る玄吾大不恰び弥切磋琢磨の功を積持を賦

小連る申ふあり。和韻贈答はして樂々凡音賢菴小勤仕と申す。更二年余小
 及び寺中の和尚も皆面を知り何きの房も親しく入る。一時任侶清
 真と檀越の佛更招れて留守あり。玄吾徒也。依り寺中の文珠
 菴の任侶を為空と呼て常小玄吾と招れ。囲碁の對手とす。あは為空と訪
 りんと文珠菴のいり。小是も他出ず。小や厨所小僧兩人机小侍て睡り居
 るのこ。音更も答る人もなし。諸公為空和尚も留守ふやと望を失ひ。あざ
 い。昔院の泉載を見せられ。幸の折々あり。子細小見ると思ひ露路下を
 後園小いり。清泉水築山樹木の植る。面白く覺へ。與小乗とて橋を
 こら。山小登り。溪下り流を歩。り。奥深く行。る。樹林の裡小樓。々
 々。急然小双六の筒を揮音更えられ。諸公為空和尚。遊客も有て彼樓
 小。双六を抄樂まる。小。美。了。竟。界。を。獨。言。茂。林。の。裡。行。く。る。小。

果して一亭有る。小。何心なく。入。梯。と。登。り。る。小。豈。と。ん。為。空。ハ。あ。で。客
 貌美麗女二人き。向ひ。双六を抄居る。音更を顧て。二女とも大。小。孩。き。
 面色小。脚身ハ何人あれ。此樓ハ来り。ひ。と。答。れ。也。玄吾答て。我ハ普賢菴
 小勤仕と申す者。て。い。が。為。空。和。尚。小。内。用。あ。て。忝。り。ひ。と。厨。所。小。ハ。ん。え。む。と。申。す。
 後園小や。脚坐らんと庭前中。と。尋。ひ。ひ。小。此。所。小。双。六。の。筒。音。更。の。や。え。ひ。諸。公。此
 樓小客人も。樂。む。小。と。推。量。し。何。心。なく。入。り。無。礼。の。罪。ハ。恕。し。も。と
 謝。る。小。一。人。の。女。を。低。り。て。曰。脚。身。ハ。い。ま。此。樓。の。巨。細。を。知。む。ら。な。か。ら。ぬ。此。所。ハ。寺
 中の僧の隠。遊。ぶ。所。也。他。の。人。過。て。此。樓。登。る。小。寺。僧。見。付。あ。む。有。無。と
 言。せ。と。逼。り。殺。と。怖。る。所。な。疾。く。歸。り。と。色。と。変。て。り。小。と。玄。吾。心。辨。り
 諸公脚身達ハ任僧の梵妻小。て。お。も。や。さ。も。あれ。此。樓。他。の。人。の。登。り。と。ん。時。ハ
 逼。り。殺。と。こ。の。こ。こ。ハ。心。得。が。我。ハ。寺。中。小。勤。仕。と。申。す。者。あれ。と。さ。る。更。も。い。す。先

御身方何國の人か。うる寺院の梵妻となりし女と向ふ。女答て去近江
 堅田村小住藤嶋兵太と呼ぶ者の女松枝といふ者来て去。年より此都奉公小
 出或公家衆の館奉公と侍小。此寺の住僧小。購ふて此樓へ押籠られし
 又是る八都の街の絹買の妻小。あつと覺淨といふ僧勾引て此所へ連来り
 一すも此樓を下る吏を許さず。強て逼り辱し。許といふを溢り殺さんと
 恐ろし。小方にて劍の中住を奪るなり。先頃此寺へ入る人過り此樓へ
 登りて住僧見付。三僧よりて溢殺。後の山へ埋蔵しを奪り。其目目前見
 妻女が恐ろし。悲し。何むあり。推量り。御身もささる。無慚なる吏小
 遇む。ぬくち小。疾く遁去り。涙あがり。小語る。玄吾ハ毎小。駭也。と去る
 曰。諸も不測の吏もいふ。我素ハ加賀國の者小。右著と求ん。酒をきて都
 へ上る途。中近江路。小て盜賊の。小衣服路銀を奪れ。為方。小湖水へ身

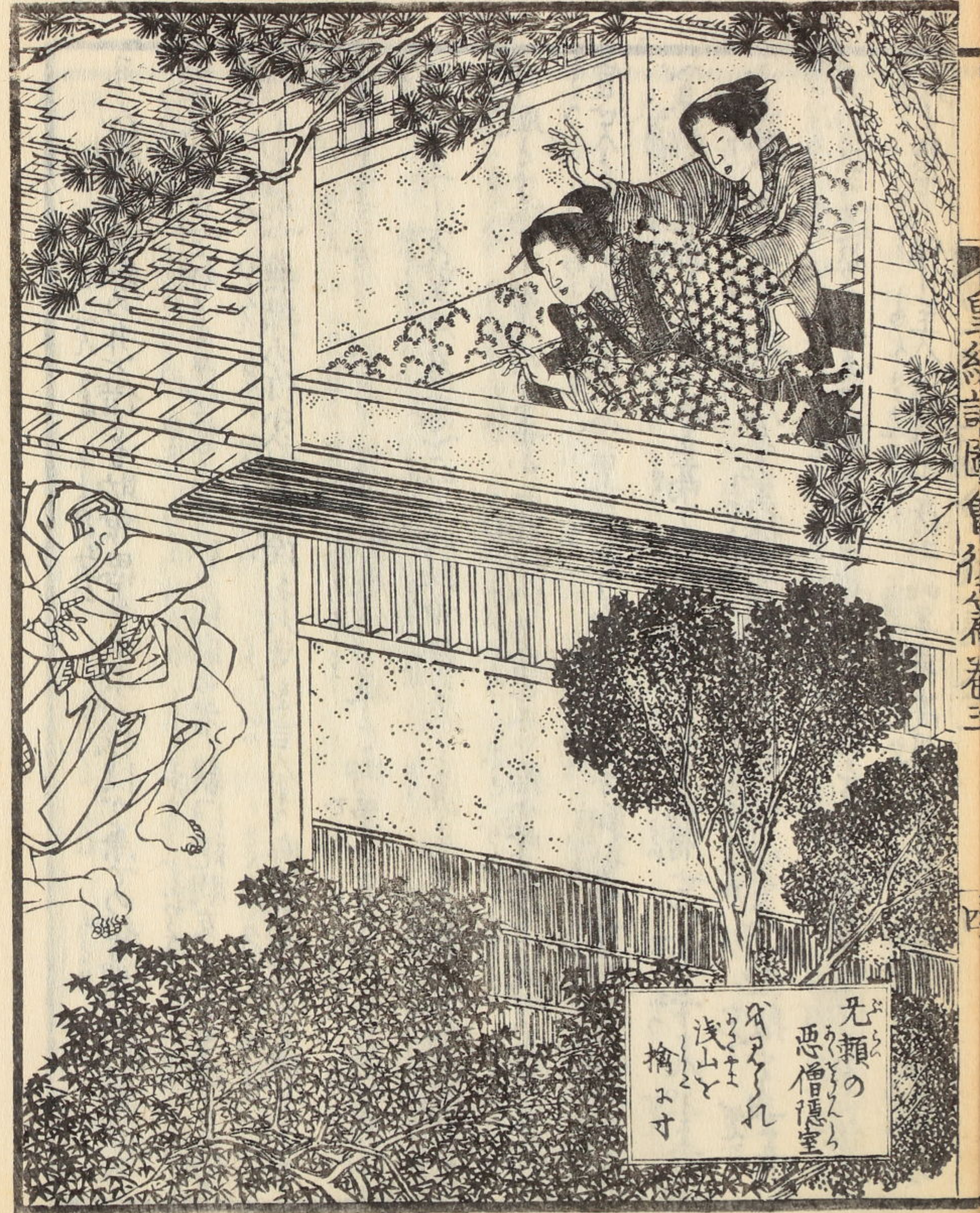
て投。成御身の親父兵太殿。お助け。これ種々。教訓の上。衣服路銀を借
 り。猶も右著の音。媒。小預り。當寺中。普賢院へ。住込。たり。其節。入の
 息女を都。奉公。小出せ。と仰。あつ。御身。息女。兵太殿の。御息女。小て。いひ。たる
 う。或。活命の。思返。小此所。を救ひ。出。進。む。方便。も。か。思惟。する。間。も。あ
 住僧。為。空樓。へ。上り。来り。玄吾。と。小。お。預。たり。又。面色。と。和。ら。げ。御。辺。何。用。有。て
 此樓。へ。上。れ。と。問。玄吾。訂。を。甲。其。吏。小。今日。主人。清。真。佛。吏。小。糸。小。田。守
 中。徒。並。か。る。先。日。の。碁。の。勝負。と。仕。ん。る。貴。院。へ。推。忝。い。せ。小。厨。所。小。八。日。を
 む。い。ご。後。園。あ。ど。小。脚。坐。る。と。尋。廻。り。と。い。ふ。此。所。へ。糸。小。無。礼。の。罪。免。し。吏
 さ。る。小。て。も。う。る。風。流。の。御。樂。と。今。ぞ。隱。し。の。ひ。と。御。恨。な。れ。と。戲。吏。の。中。り。小
 言。々。れ。も。為。空。六。各。も。せ。ど。先。此。方。へ。来。り。い。と。玄吾。を。伴。ひ。樓。と。下。り。室。の
 内。へ。入。り。て。外。より。戸。を。噓。と。の。鎖。と。わ。ら。す。音。也。え。と。る。也。玄吾。心。中。安。く。小。諸

と松が枝が物落のてくれ我も通り殺さん巧と力と始より斯とあるを私くら
く為空を捉へ左も右もせんどもを賺して此場を遁は公廳の所へんと
思ひ手延ぶと却て死穴の陥しと悔れと後悔勝と啗をうりけり程あ
為空六覚浄とくる同僚の悪僧を伴ひ来り鎖を開く内小入玄吾とくる眼
を瞋し你女小我徒が密遊の樓上一天の尽る所かり今六覚期と速
く自滅せよと罵り懐中より細索と短刀と貼の毒茶と取出て玄吾が前小
あふ置此三品の中你が欲する品にて死を急よと猶豫小及も我徒两个
て溢り殺を命と命尾の付覚浄も悪さば疾疾せよと急まきり玄吾は心師
て強ぐ心を押鎮め是六日未の御好意も似る仰ふ下僕ハ御寺中小住者の
て所習は死穴の狐小比を何を和尚方の密更成他小洩しは死如何の誓
詞神文をも書いべ此度の命と助けよと詞を掲と謝頼れども為空嘲

こい你布留那の弁と借も助命思もあらず我徒が兼ての誓盟小剃髪浴衣
の者ハ隱宅と知とも是と怒り有髪俗射の者ハ親門袍朋友より決して死を
許さざと況や無縁の你小於也詮めれ更を言ふより疾寂滅せよと睨とえて
言々も玄吾言ふ曰色を僕も剃髪得道と御弟子となり犬馬の勞と尽して
仕もさべり万望御慈悲にて御助命給りべと涙とも小願ども両悪僧之馬
耳風と流し覺浄玄吾小ち向ひ你日未の常給ふ学業上達せを宦家仕
官せんと言し小非や然小今更の叶ひを望んで俄小剃髪と望ひとも何と許す
べき你を生置てハ我徒杖を高くまきいびく死は遲滞せむ手と下さんと玄吾と
中小控と己小通り殺さん其体牛頭馬頭の罪人を呵責す小一般と玄吾ハ
其勢ひの遁れざるとして絶とまき方便なく然仰とる上と力かり湊く君小伏す
死に命を但一人清真御房ハ此年来高恩を受且中遺りて取索要の



浅山玄吾



元頼の
悪僧隠室
浅山と
梅子寸

元頼の悪僧隠室

更もいむ生煎一同逢しめは然も甘心と快く自害しめしと言れを為さず
 曰你清真小逢て助命とて人の對面を望むるも清真とて我
 と同意あれを敢て你を助命とす然も日来好染小對面は得ず
 とて覺淨とていふ吾を緊く縛り然と覺淨小清真を呼來しむる間も
 かく覺淨清真を同道とて来りたる諸清真は吾が縛られんて死
 ちるを吾小向ひ你我が留守とすむと安外出とて我徒が隱所を見し你不覺
 あり年来信やふ勤你が此条のを見道し是余你が前生の惡業
 爰小報ひし然も皆くおも玉徒とて好染を以て逼り殺し更公免
 得さすべ只此三品を何まかりも欲する品を用ひて自殺せよ亡骸は我埋葬
 親宗跡を吊ひ得ずとて言せ諸為空覺淨小向ひ我徒三人の手にて渠入
 を逼り殺さん安れも流石此年月召使し者多れ手と下を小不忍此室小

因籠をけを隱形の術を得たりとも遁き出入更能べし今日死せむんを明
 日明日死せむんを明後日よも吾と過さば五日と過しとも死むを其時
 小我手づりり殺し殺すべ只皆く渠が自滅する候待すべと宥りたる小兩人
 もやしく納得しきもとて三僧も外へ出堅く鎖をわたりて己が隨意立別
 りる云吾小思ひゆあぬ大難小遭今小道かく三僧の隱惡と惡も憤
 り我身の薄命と悲も胸を焼し腸を破る心地し今ハ助るやれ命め
 まむ死と一念の怨鬼とかり三僧を魁殺して此仇を報せんとの心を定めとも
 溢てや死とむた刃小や伏せんと索と上短刀を抹て見千思万慮とれも更
 小心決せむと忙しむて途方小昏り然る小樓上小松が枝を吾が寺僧の為小
 逼り殺さん更を哀れ又兵太がきも慈善の心を以て命を助し者て又悲命の
 死をふと更の便あさよと心中小深く歎し小清真が宥り小依下たる一室小押

篋自殺せむるよしを親の少少い心死安ん如何も救んものと今二人の女とも
 高様一連れ出ぬ手段を微細と書きあてて并ふ堅く巻置と上て板敷
 の透間より下(落)りたる去る死覚期の思惟小迷ひ手と共て黙坐と半
 居る小忽ち上より落る音せし小短巻と首と上て左右をなれ果して二物あり
 手小把てこれ竹の并小巻る文なり急た巻戻と續てこれ松の枝が手跡
 と覚し室中と通し出ぬ手段を記し身と連れ出ぬ官小松(妻)女們を由
 救ひよりの文意なり去る吾大い悦ひ海月の骨と得る思ひの文の教つて
 草索の端小短刀と結付て深とち越せ其索と手繰り上り手して深より付身
 と匍匐て屋根際の際を短刀で切破りよくと潜り出てこれ早月黄昏過
 小く仄暗りたる由天の佐と悦び下(下)り後の山より無二無三小身と通す万
 死と出て一生をど得る斯く其翌日小ゆかりぬむ三人の悪僧集會し今ハ

彼者自滅せしむる死骸と埋も隠んと樓の下の室いり鎖をわけて入る小
 豈そと人吾の死の影も見えぬ三僧とも愕然とて大い泣く斯鉄桶の如
 く堅固小建一板屋を如何と抜出んと評議し所と見捨る小屋根際の際と
 人の潜るやと切破り有る小を備へ彼所より遁し出小疑ひかり先日逼て溢り
 殺とぬれ奴を清真の釘よりして摘取し捉逃せと大吏をれと足摺して悔れども
 其注ち為空面色如菜葉奴身と全うせむ有司の廳へ松る治定り我徒
 僧法を犯して隠妻を殺し命を殺せし吏露頭其を必官吏召捕小来り噫
 是れ如何と云ふと三人面を見令日未ハ奸智小くける悪僧も眉と焼の危
 急小及び更小分別も出で惆悵て癡人の如し清真よく心を鎮め今更過る
 吏と千度悔も及死あふと三人の女今宵他國へ落りて身を隠させ我徒ハ雲
 水修行と言ふ言ふ影と隠えん如何と言ふを為空覚淨実もと同意し先

日の暮るむと二人の女は後の山深く身と隠させ、その調度遊戯の緒言は、かく
 後園の井中へ沈み隠し、おどろけ、狼狽騒が、半の舞足の踏を、知むに
 ち貪り、賄へ、金銀を肌を着、専ら、落支度、を、急た、る、是より、公前、浅山
 去、吾、左右、と、も、つ、楞嚴院の山を、超て、身と、遁、を、年、来、懇、意、の、学、友、針、へ、ぬ
 楞嚴院の寺僧、が、奸、悪、の、條、と、遂、一、小、告、げ、れ、ぬ、者、皆、遠、を、切、て、惡、く、憤、ら、ざ、る、は
 を、依、て、去、吾、の、学、友、と、俱、小、辨、狀、と、書、記、て、有、司、の、廳、へ、辨、へ、る、小、即、ち、去、吾、小、巨
 細、を、歩、し、し、寺、僧、の、惡、行、更、明、白、な、れ、ぬ、追、捕、の、官、吏、數、十、人、を、き、遣、さ、れ、る、去
 程、小、官、吏、の、面、を、楞嚴院へ、地、到、り、房、毎、小、踏、込、寺、内、の、僧、俗、を、悉、く、搦、捕、せ、る
 小、と、為、空、清、真、覺、淨、三、僧、ハ、本、堂、の、内、陣、小、寄、集、て、旅、支、度、を、整、へ、居、る、小
 早、官、吏、向、つ、り、と、歩、み、の、外、小、仰、天、須、弥、壇、の、下、佛、像、の、影、に、く、這、隠、せ、佛
 名、と、唱、へ、慄、た、居、る、と、官、吏、来、り、て、搜、し、出、て、搦、捕、二、人、の、梵、妻、女、を、母、す、小、更

小在所、ま、れ、され、ぬ、三、僧、と、曳、居、弘、向、せ、る、小、左、右、陳、と、白、状、せ、る、と、強、く、踏、向、し
 ら、れ、を、苦、痛、小、堪、え、ぬ、遂、小、後、の、山、小、隱、し、る、由、白、状、せ、る、是、小、依、て、後、の、山、を、母、す、の
 二、人、の、女、も、搦、捕、以、上、三、十、余、人、を、曳、て、有、司、の、廳、へ、り、斯、と、言、上、る、小、と、悉、く、獄、中
 へ、入、置、中、亦、惡、僧、三、人、を、水、火、の、責、お、け、て、踏、向、せ、る、小、己、が、惡、行、を、悉、く、白、状
 せ、ら、れ、る、有、司、甚、く、惡、く、僧、徒、の、身、と、他、人、の、女、妻、女、を、勾、引、刺、し、隠、所、を
 見、し、者、と、逼、り、殺、せ、り、余、言、結、了、所、の、重、罪、な、り、と、大、路、由、肆、一、重、く、死、刑、小、行、れ
 其、余、の、者、ハ、侵、犯、の、科、な、り、と、も、三、僧、の、奸、惡、邪、淫、と、知、る、者、皆、疾、奔、へ、る、罪、小、依、て
 重、た、ハ、流、罪、狂、れ、を、追、放、小、行、れ、る、次、小、二、女、ハ、惡、僧、と、母、す、白、状、せ、れ、已、更、を、得、ぬ
 寺、中、小、押、筆、ら、れ、住、せ、趣、れ、ぬ、罪、が、一、と、其、親、夫、を、召、出、と、引、渡、され、去、吾
 と、辨、人、の、廢、衣、賞、と、て、金、子、と、給、ふ、楞嚴院、の、一、件、落、著、一、愈、僧、尼、の、不、法、を
 林、下、ら、れ、る、浅、山、去、吾、ハ、三、僧、の、死、刑、小、行、れ、ぬ、見、て、憤、を、暗、し、且、官、小、更

御寮美をまへ給りし松重支限りなき心小思ひく我兩度の大危難を免れ
 八藤嶋又子の厚れ情小侍とて免れを思を謝せざんを有らざる堅
 田村なる兵太が家小りり又子が再度の鴻恩を礼謝し謝義のめ一畏り金
 子と早し多小兵太固く辞して押返す去吾が高運を賀し今度の折松小
 依て女松が枝も無難小之りを悦び去吾と家小苗悦びの酒を酌り多松が
 技いよ定する夫も年年齢も似合し名を遂小去吾と婿とわけて取寄る小
 去吾大の悦び京都へ出て医業と如多小追く敏系昌し兵太をも呼りりそ
 夫婦孝養と場し安樂小老と養へめ多小偏小隱徳の陽報なりり
 釋空海幼推奇行 阿波大瀧山土佐室戸崎苦行更
 嵯峨天皇の御飯依僧小寂室海とて本朝無双の名僧在り其系譜を
 尋るふ父八瀨岐國多度郡屏風が浦の住人佐伯氏母阿刀氏たり抑佐伯

氏の先祖八景行天皇の皇子稻脊入彦命とて人日本武尊小隨て東夷
 を征伐し頗る勲功有るを其恩賞とて瀨岐國小地を班ち給りり
 より屏風が浦を居所とて稻脊入彦命の孫阿良都別命の男豊嶋とて
 人孝徳天皇の御宇小佐伯直と姓改り後直を略して佐伯氏と名乗れ
 其子孫の佐伯某伊豫親王の学師從五位下阿刀宿禰大足の姉と娶て
 妻とすと世示佐伯氏初老の比や一子無を歎た三室小祈誓して一子を授
 めんと丹誠を疑し祈され其信心を諸佛も感納在り一夜の夢小一人
 聖僧端嚴微妙なるが妻阿刀氏の懐中へ起入るとして夢覚り諸夫婦
 夢を語合ふも小祈の夢ありり多奇異の思たりり内程か阿刀氏妊
 娠し十二月小平小男子と生り是光仁天皇五年六月十五日なり父母の悦び
 斜めを靈夢を感じて儲子とあれとて推名と貴物と呼電愛すること

掌の玉のごとく。此兒四五才の比より尋常の兒と交り遊をむ。只土を掘て
 像の形を作り。或は竹木を以て堂舎の体と換。礼拝供養をせむと遊戯
 して樂むるも。父母相語て此兒成長の後ハ出家得道すべしとやされ
 る。然も貴者六才の年夢小緒の佛菩薩八葉の蓮花の上座して說法
 志むるとんり。其も推心小の深く秘して父母も夢の夢と語らむ。内心ハ
 佛ハ入んとの志願是より起り。斯て後ハ弥三宝を崇り菓餅を以て得
 らば。先佛前小供て供養。其後あて食する更なり。八才の年都の巡察使
 續州へ下有るを。國中の男女老少路の両辺小群りて其行列を見物。小
 貴者も衆人小雜りて。小見物。巡察使貴者を見て俄小馬より下て
 礼拝。其所を過て。馬小棄られ。衆人不審暗む。何也や
 んと私語合々。杏小行とぎて。巡察使の從者主小向ひ。今彼所小下馬

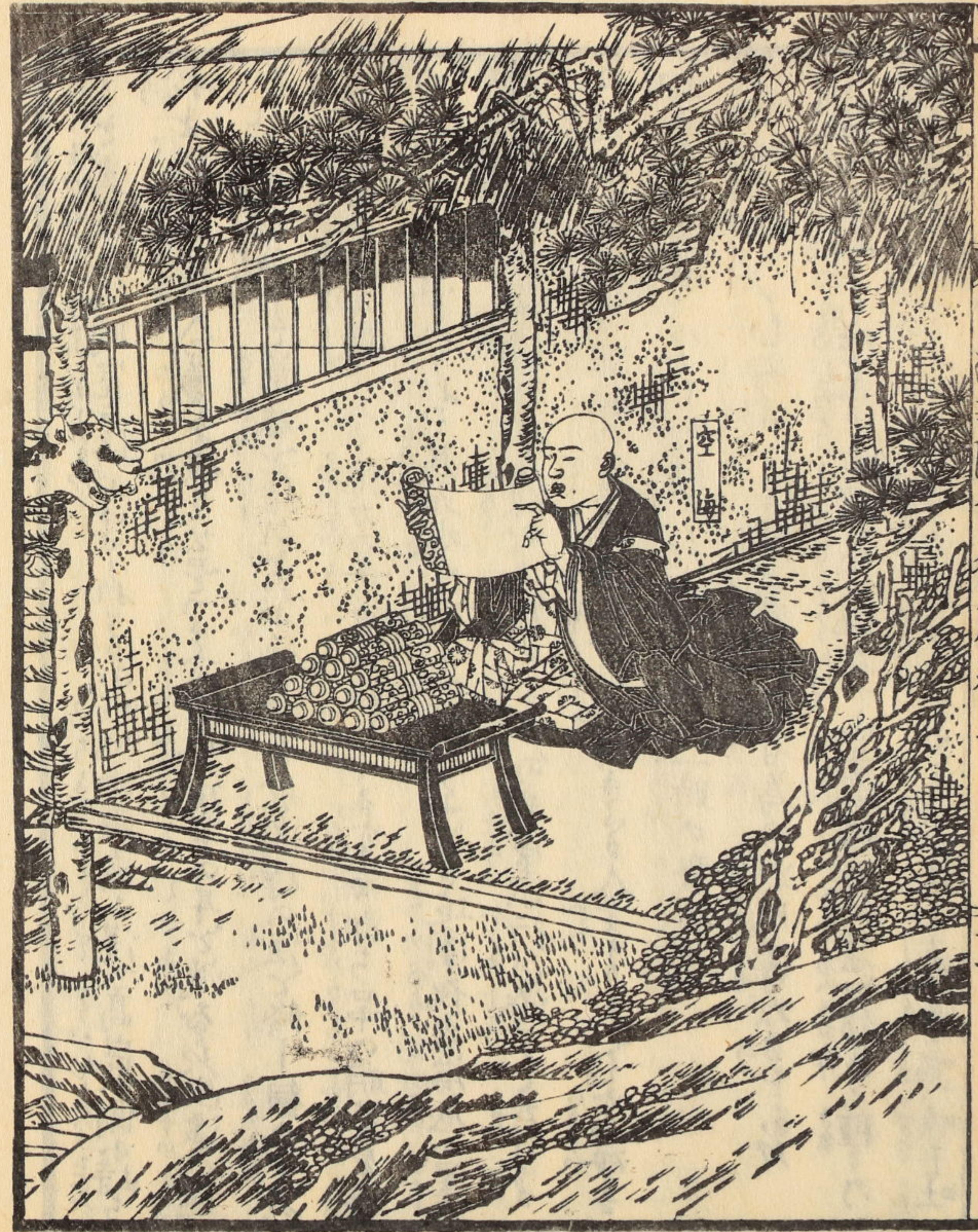
礼拜。小ハ如何なる故小やと問。巡察使曰。你ハ人々を彼所小居る
 小兒ハ人々を。四天王天蓋を捧て守護。更り我何ぞ下馬せさんと語り
 る。小ハ是より貴者。維りて。佐伯氏の子ハ神童あり。と言觸る。其
 後貴者十二才小なり。少くハ智万人小勝。其行迹長者も及む。三宝を崇る
 更倍深り。一時間又我子小向ひ。父の家督と嗣て先祖を耀。一國治
 めんとす。や。出家得道して佛菩薩小仕んとす。や。同く小貴者。父を
 とい。武士となりて一國の政事とよく治る。も。鏡小一國の人民を安穩ありむる。と
 出家して佛道を修行。昔く末世の衆生。消度せん。と廣大の功德あり。と曰
 る。小ハ又も理小伏して再い言と。幾も更能む。と。外威阿刀大足。来りて佐
 伯氏小曰。子息已不才。及む。と。大學小入り。経典以て學む。我都
 將て上り教導すべし。と曰。れ。父母も。始り其小順ひ。貴者も大足小預け

々るゆへ大足貴者と將て都(上)り大学小入りも讀書と指南たる小天性凡人
 ありぬ奇童ありて一度讀む暗記し二度讀む理に通じ多る小ど大足も小
 感也。我此兒小不及と遠く驚歎する。斯て貴者大足の許小留學して
 螢雪の功を積こし三年。普く緒經と學び究め十五才の年學士淨成の隨ひ
 毛詩尚書易經等と學び十八才にて又岡田の博士小就て春秋左傳を學
 ひ其余の書典涉獵せざる隈もあ。皆其深理緼奧を究め手跡も無双の
 能書なりをいふ。成童して博學能書の名世小高。然も貴者儒道
 小心を留めど心中思想猶今まで學びる典籍は只眼前の理のみにて一期の
 後の利源なり。不如誠の福田を求めんとて岩淵の贈僧正勤操の弟子となり
 て佛道と學び一切磁球磨りて大虚空藏ありて能滿虚空藏の法と授
 りたり。此法は往昔大安寺の道慈律師大唐小渡り緒法を學びて小善

免畏三藏小逢く其真旨と授り。歸朝の後大安寺の善儀小傳へ善儀又勤
 操小授ける大秘密の法なり。去程小貴者法名と免空と改り佛道修行小
 丹絨を凝し三教指歸と書と編延暦十六年十二月初の日草稿成就す
 其文意ハ俗教の益ありを述られ也。書の略小曰朝市の栄花ハ念く小是之
 いひ。嚴敷の烟霞ハ日夕小是を紅く。狂肥流水と日々く。即ち電幻の歎也
 忽ち小起り支離懸鶉を見てハ則ち因果のあり日毎小深し。目小ふれて我
 を勸む。維る風を緊む。茲小一の親戚あり我を縛る小五常の索とて。我
 我断る小忠孝小背く。とて以て予思ら物の小心あり。飛沈性皆異く
 くのゆへ小聖者の人を得小教網小三種あり。所謂秋李孔なり。浅深隔有と云
 ども並小皆聖統なり。一の羅小入を何を忠孝小背ん。云々此書一部三卷
 始と聾聾指歸と題せられ。後小三教指歸と改められ。今も世小傳り

普く緇素賞覽せり。斯く无空六佛道修行の事。普く山林雜所を涉
 覽して修練の爲に身命を抛れり。師勤操僧正の苦行をまねて
 无空の十九年の年。延暦和泉國榎尾山の中山西宝寺。於て剃髮せ
 り。沙弥の十戒七十二の威儀を授け法名を教海と改めり。後又如空と稱せ
 られり。延暦十四年四月九日東大寺。於て唐僧春信律師と傳戒の導師
 と。勝傳豊安以下とも。比の具足戒を受此時。名を空海と改め
 らる。是より戒珠を胸の間に佩し。徳瓶と掌の中を携へいよく俗塵を
 倍坐閑を去り。山より山へ入峯より峯へ往り。練行日と重の薰修年と
 送り煙霞と掌で飢を忘る鳥獸不到。友とも。或時阿波國大龍の嶽に
 登り虚空藏の法を修行せり。忽ち二振の宝劍壇へ祀来りて虚空
 藏菩薩の靈感と顕る。件の宝劍大龍の嶽の不動の窟に今尚納れり

と。其後土佐國室戸岨に於て。此地南海前小湛へ高巖殿側小持ら
 松を拂嵐旅人の夢を破り。芝草つる谷の水。徳士の耳と洗。空海即ち口中の明星を海
 へん。是を愛して草菴と結び。小住居して求聞持の法と修。観念せり
 々々。明星口中散り。入る佛力の奇異と現る。空海即ち口中の明星を海
 中小向ひて吐出され。其光水。沈み末世の今。追圍夜。小海底。小星の
 光。聚成。不思議と。可疎かり。斯く室戸の菴室。小行ひ澄して在り。多
 小遠近の里人。空海師の道德を慕ひ。訪ひき。人々。多り。空海を
 却る。是を煩々。物強。れ。更。小思。れ。一時の歌。小
 法性。の。むら。戸。とき。け。我。任。む。有。為。の。波。風。寄。ぬ。日。ど。あ。れ
 と。詠。ら。れ。る。此。室。戸。の。海。小。惡。龍。在。て。空。海。師。の。行。法。と。妨。ん。と。種。々。の
 形。小。變。が。出。現。し。る。空。海。公。於。て。少。も。怖。是。と。真。言。と。唱。へ。唾。を。吐



くけられくろ小其光散じて衆の星の闇と射多如し。是小依て毒龍心と
ひ退散して再び障碍をおとす。更熊とて右の唾海濱の沙石小とす。なり
て。今猶夜光の珠の如く昏れ夜光を放つと云。室戸の崎より此余町
を隔て一箇の勝地あり。空海師其地小一字の伽藍を建金剛定寺と号け
られざる。空小其辺の魔魅佛法を障碍んと異類異形の姿と現くを
空海即ち结界して魔縁と回答す。我所小在ん限りハ你们此寺へ来る
をうきとて。年歴大木の楠小自身の像と彫付置と云。魔類其後と
形出現し得ざりたり。其後空海師諸國を経曆して難山切所の今通ハ
ぬ所の道を踏用く。更敷まれど播大國にて老女の菴の柱小天地合の三
字と書付られ小其筆痕深く木小今削とも矢ど。瘡疾流行病と受
者ハ件の文字と水小うして飲を立所小愈ると云。又伊豆國桂谷小てハ

虚空へ大般若經の大事品の文を書て永く障と云。其他諸國小く
悪く毒蛇を降伏して人民の害と除く。更敷と云。実小不可思議の名
僧と云。貴賤と云。其法徳を尊信せらるるなり。

空海師入唐求法 以五筆書詩水上題詩條

空海師佛法弘通の爲小諸國と廻り。遍く諸宗の碩徳小就て諸經の編
真を問究せられれども。三乗五乘十二部の經猶心底小疑ふと云。看て決
もる。更熊と云。佛前小於て誓願を起す。おれ願くハ三世十方の諸
佛菩薩垂我小不二の要旨と示して疑ひを解しめんと。一心小行られ小一夜の
夢小神人ありて告て曰大和國高市郡久采の道場の東塔の本小妙經あり
大毘盧遮那經と号く。是往古中天竺の善无畏三藏此日本渡り彼道場
小収めせりと云。わり。早く彼所小到り右の妙經を閲して疑ひを解べと告

とて夢覺さる。空海師大に歡喜ありて。急死和州久米の道場より東塔の内陣に入り求らる。果て大毘盧遮那經と題せし經卷有る。頃小戒を解て圓せしむ。猶も疑ひの解ぬ所ありけれ。今本朝にて疑惑を同明じむ方なり。此より唐土へ渡りて名僧を尋求胸中乃疑ひを解んものと。始て入唐の望とぞ發せしむ。叔二十四の年三教指皈の清書とせん二十七と云く阿闍大龍山を開基ある。其後三十二の年時撰武天皇。藤原葛野丸を遣唐使せし。副使石川道益判官菅原清公録吏ハ浅野鹿取なり。是に依て空海師求法の為入唐せし。其首を願ふ。則ち勅許あり。葛野丸の船ハ船あり。此時小叔最澄大師學士攝遠成り。船を願ひ入唐せし。時延暦二十三年八月上旬遣唐使以下の船肥前國松浦より出帆。海上障り。八月十日唐

土の港へ着岸し。唐帝の觀察使濟美といふ者。和國の使者と疑ふ。船より上りし。十月十三日。船中置る。遣唐使葛野丸大に退屈。空海師を招きて書牘を作りて。其清美の方達せし。清美其文章の奇絶なるを感。遂に疑念を暗して遣唐使以下と船より上り。長安乃都へ送り。空海師の文。妻ハ略斯く。空海師ハ翌年三好唐の西明寺乃永忠和尚の故院に逗留。其比唐土より碩徳の聞え高た青龍寺の慧果阿闍梨の許に入り。始て謁見あり。慧果満顔し。喜色と表し。我々と待吏久として。旧相識の言談。懇心宣侍。法義と議論と緒の秘法を授けらる。申ふも五部の灌頂三密加持の法を傳授。大悲胎藏曼陀羅の灌頂を授けらる。空海師華と拙く。毘盧遮那如來の身上著され。慧果阿闍梨大に是を賞讃。右より。日年七月。空海師又金剛

曼荼羅臨五部の灌頂を受華と抛て再毘盧遮那佛の身まんぢうあつに著あり
 されども阿闍梨あじかりより大の賞嘆さつたんあり。二度あるも二度まで毘盧遮那佛
 小抛得るうちえ更さら今いまの例れいをばと子こ緘かん小せう夫ふの昔むかし執しやく尊そん秘密ひみつ真ま
 言ごんの印いんを金剛薩垂こんがうさつじ小せう付ふ属じゆくのの薩垂さつじを龍猛りゆうもう菩薩ぼさつ小せう傳でんへられり
 展轉てんてんして不空三藏ふくうさんざう小せう傳でんりり不空ふくうを我われ小せう授じゆけられり。你みづかとんる小せう秘密ひみつ大
 根こん器きあり。依よて我われ金胎こんたう二部にぶの大法だいほふ秘法ひほふ緒しゆの印信いんしん及び及び金剛頂瑜伽こんがうていよか五部ごぶ乃
 真言まごんを悉しやくく授じゆへりて。懇こん小せう傳でん授じゆへり。你みづか此こゝ金剛乘教こんがうじやくおよび三藏さんざうの所付しよふ供
 兼けん付ふ物ぶつと云いふ本國ほんこく歸かへり緒州しゆしゆ小せう真言まごん秘密ひみつの法ほふと云いふよ。去こゝろを四海しやくかい太平たいへい小
 て万民ばんみん豐饒ほうじやくある處ところと。緒しゆの經論きやうろんあり。不健ふけん陀國たこくより傳でんれる袈裟けさ白珠はくじゆ
 數ずホと遍照へんしやく金剛こんがうとを号なづけられれ。空海くうかい師し歡喜くわんぎ踊躍うよく小せう堪かんむ深
 師し恩おんを謝しやくせられ。其その後のち慧果えいこ阿闍梨あじかりを入寂にじやくの期き近ちかむを

覺かくあつて空海くうかい師しを招まねた我われ徒弟たてい數かずありと云いふ。皆みな其その器量きりやう狭せまく根氣こんき
 薄うすくして佛法ぶつぽふの蘊真うんまを悉しやくく讓ゆづり授じゆへり足たりむ。茲こゝ小せう你みづか遠とほく此國こゝ小せう來きり
 師弟していの契約けいやくを。我われ秘訣ひけつを盡つくく傳授でんじゆへり。今いま望足ぼうそくあり。我已われ小せう現世げんぜの化
 縁えん盡つくあふと久ひさく苗なまふむ。前まへの經論きやうろん佛具ぶつぐあり。讓ゆづりよられも尚なほ又
 遺いる宝器ほうきと讓ゆづりよられ。佛舍利ぶつせり十粒じゆじやく。舍利せり一粒いちじやく有あり。白牒はくだつの大曼陀羅だいまだら
 五室ごしつの三昧耶さんまいや金剛こんがう及び種しゆの靈器れいきを悉しやくく授じゆへり。懇こん小せう遺言いごんありて程ほど小
 病床びやうじやう小せう步ふ臥ふ遂つひ小せう在ざいる。永貞えいしん元年げんねん十二月じふにがつ十音じゆいん手て小せう密印みついんと結むすび眠ねむが。く
 僊化せんげせられ。緒しゆの徒弟たていの悲歎ひたんあり。我われ空海くうかい師しの已まて歎なげの色深しん
 く紅淚こうるい小せう三衣さんいの袂たもとを絞しぼむ。追憶ついきの念ねんあり。則すなはち師しの慕そふ
 碑いしを建たて自身みづか碑文いせんと作り慧果えいこ阿闍梨あじかり二代にだいの道德だうとくを綴つづり著あされ。其
 文辞ぶんじ絶妙ぜつめうあり。唐朝たうてうの鴻儒くわうにゆ碩德せくだくも是こゝと賞美さうび。人口くわんこう小せう繪象えいざうあり。多

空海師より不空三藏の高徳を慕ひ其住所(尋行)相見せられ空
大に悦び我幼者の昔より佛門に入普く五天竺を經歷修行し此唐土(唐)にて
法を弘く更にお海(海)の法(法)を日本へ渡り私法せんを欲せしが期(ま)に熟(ま)せし身
己(おれ)の老(おれ)より其(おれ)の逢(あ)ひ逢(あ)はれ我(おれ)の願(ねが)ひの達(た)ちをなれ時(とき)なり依(よ)つて我(おれ)を譯(わけ)せし華(け)嚴(げん)六
波羅密経(はらみつぎ)おび秘(ひ)密(みつ)の経(ぎやう)論(ろん)を授(たま)はる我(おれ)の交(まじ)りて任(まか)せし法(ほ)法(ほ)と云(い)ふ
されども空海師(くわい)の歡(よろこ)ぶ小(こ)堪(か)む即(すなは)ち止(と)まらざる諸(しよ)経(ぎやう)の秘(ひ)訣(けつ)と悉(しつ)く學(まな)ぶ究(きう)哉(や)
干(かん)あまをて来(きた)り其(その)云(い)ふ昔(むかし)の通(つう)達(たつ)せられけり不空(ふくう)其(その)後(あと)方(かた)と深(ふか)く感(かん)賞(じやう)し南
天竺(てんぢゆく)龍(りゆう)猛(まう)菩(ぼ)薩(さつ)より傳(でん)来(らい)せし三(さん)股(こ)拏(な)及(およ)び諸(しよ)の経(ぎやう)卷(まき)と盡(ま)る附(つ)属(じやく)せられ
る空海師(くわい)の大(おほ)に悦(よろこ)び拜(らい)受(じゆ)と恩(おん)を謝(あが)ふ辞(ことば)と告(つ)げて旧(ふる)西(せい)明(めい)寺(じ)の故(こ)院(いん)へ歸(かへ)り
任(まか)せし唐(たう)の帝(てい)憲(けん)宗(そう)皇(わう)帝(てい)空海師(くわい)の博(たつ)文(ぶん)法(ほ)徳(とく)を睿(えい)聞(ぶん)あつて宮(みや)
中(ちゆう)の君(きみ)と緒(じよ)経(ぎやう)の文(ぶん)義(ぎ)を問(と)ひ空海師(くわい)悉(しつ)く言(ことば)下(くだ)り答(こた)へらる(る)更(さら)に御(ご)音(おん)の物(もの)

小(こ)應(おう)むらさき如(ごと)くあれ憲(けん)宗(そう)帝(てい)其(その)剛(ごう)記(ぎ)能(ね)弁(べん)と大(おほ)に感(かん)賞(じやう)ありて重(おも)く御(ご)食(じやく)應(おう)
一(いつ)須(す)帛(ぼ)珠(しゆ)玉(ぎよく)を賜(たま)ひ宮(みや)中(ちゆう)小(こ)苗(な)を種(たね)く宣(のたま)侍(じやく)のい(い)たる宮(みや)中(ちゆう)三(さん)間(ま)の張(た)壁(へき)
あつて晋(しん)の右(みぎ)将(しやう)軍(ぐん)王(わう)義(ぎ)之(の)手(て)跡(せき)をとめらる(る)小(こ)年(ね)経(ぎやう)て破(やぶ)壊(かい)せらる(る)今(いま)今(いま)
般(はん)二(に)間(ま)を修(しゆ)理(り)させられい(い)ま筆(ふで)と下(くだ)る程(ほど)の能(ね)書(しよ)と得(と)れられ其(その)後(あと)おて有(あ)り
々(々)れ憲(けん)宗(そう)帝(てい)空海師(くわい)和(わ)尚(じやう)小(こ)對(たい)ひ師(し)の能(ね)書(しよ)の字(じ)を高(たか)し此(こ)壁(へき)小(こ)一(いつ)筆(ふで)と渾(こん)ひい
仰(おほ)せし小(こ)師(し)さ(さ)らに辞(ことば)する色(いろ)なく左(ひだり)右(みぎ)の手(て)足(あし)小(こ)筆(ふで)と執(と)ちこ小(こ)筆(ふで)と會(あ)はり
所(ところ)小(こ)五(ご)行(ぎやう)の書(しよ)と同(どう)時(とき)小(こ)書(しよ)れらる(る)其(その)筆(ふで)勢(せい)墨(ぼく)色(しき)殊(こと)絶(たつ)て龍(りゆう)牙(が)虎(こ)爪(づめ)とものい
る古(いにしへ)の王(わう)義(ぎ)之(の)王(わう)献(けん)之(の)と(と)も猶(なほ)及(およ)びむらさき斗(たう)たり今(いま)二(に)間(ま)小(こ)墨(ぼく)と盤(ばん)小(こ)壁(へき)
小(こ)向(むか)へてむらさきけられらる(る)自(みづか)らと樹(じゆ)の字(じ)小(こ)ま(ま)り上(うへ)下(くだ)左(ひだり)右(みぎ)の位(ゐ)置(ち)正(ただ)し
々(々)れ帝(てい)も諸(しよ)臣(しん)下(くだ)も是(こゝろ)ををる人(ひと)敬(かしこ)み嘆(なげ)むせむ(む)行(ぎやう)く(く)帝(てい)睿(えい)感(かん)のあま
軼(おと)して五(ご)筆(ふで)和(わ)尚(じやう)と(と)い(い)号(ごう)と(と)下(くだ)されらる(る)戒(かい)小(こ)前(ぜん)代(だい)例(れい)を(を)むと後(あと)代(だい)又(また)有(あ)り
皇(わう)統(とう)記(ぎ)圖(と)會(かい)後(ご)代(だい)卷(まき)三(さん)

能書小て敢て几庸の及むざる所あり。唐帝空海和尚を深く尊信あり。願
 くハ師永く朕が國小留りハ朕が師と仰た大寺と建立して住せしむ。宜ひ
 多れとも空海和尚承伏の色なり。君命滅ふ忝めハも。拙僧身と忘れ命を
 抛つて遠く蒼溟と渡り貴國小来りハ佛道と倭國小弘め普衆生と
 化度せんともてハ心恐あらず。王命小應じも難くと辞しやされども唐
 帝も抑由ちもふ更能くぞ。まを現世の契ハ薄くとも来世ハ師の教化と永
 受たれ澄ふと宝庫小秘置まざる菩提子の珠數と給り其餘等々の
 宝器と下されを和尚大い小怡び謹んで頂戴あり。右の念珠ハ今猶果
 寺の宝藏小納有とや其後空海和尚城中の東西南北を巡りて遊覧有る
 所一流の洞河あり。少時停立水相を觀じて在る小忽ち一人の童子
 颯然として出来り。空海和尚つて童子の体とるる小蓬の髪ハ乱る

肩ふる。身小著る藤の衣ハ破る膝も見かり。時小童子空海和尚小向
 ひ師兄ハ倭國の五華和尚めて在ると同師とるると答られ。童子が曰
 ありて此流る水の面小字と書てんせの。と何所より筆硯をとり来りて和
 尚の前小置り。置り空海師と安ん義ありとて筆と執水面小清水と續ら
 詩を書れらる。文点小乱れ鮮小文字浮て流れ下りる。童子ハ
 屢感賞し。師小做ひく我ハ一字と書て試みか。と筆と執てはく水面小草
 書の小字とて字と書らる。是も水小浮て筆勢も流らず又流る。更か。並
 小字小右の点を。童子は空海師童子小向ひ何也。と点を。童子ハ
 と問まらる。童子完示して。冥心とていひ。と言さる。筆と執てはく。つてひ。と
 勿心。山河鳴動。水面の龍の字。眞の龍と変。光を放ち鱗角と鳴。雲と
 呼起して虚空ハ飛昇り。其時童子も身と躍して龍の背小乗らる。と見



文殊童子現く
空海小
奇蹟とる
しあ
り

文殊童子



文殊童子現く
空海小
奇蹟とる
しあ
り

文殊童子現く
空海小
奇蹟とる
しあ
り

多かか心盡くして端嚴微妙の法相と化して是は文殊菩薩なりと宣し脚
声ゆつもの虚空におちてそのひくは是木の奇特を首として百般の不思議と
現し多岐限なりを唐の君臣及び下々の万民まで活佛の如く尊び

空海師 帰朝鎮難風

投筆并蘭溪書額條

去程小空海和尚慧果不空兩知識及び唐土の名僧小悉く錫見して求法
残る所なく学究め在唐已ふ三年おもひのれ今帰朝せんと思れる折柄
学士攝逸成由勤学畢り帰朝せんやれ多岐の幸の船連よめて唐帝の
帰國の義を願ひ其比倭國の使者高階真人の船唐土へ来りしを空海
逸成其船の便船を乞ふ遂小唐の元和元年 歸朝大 八月十日小纜を解
り出帆し順風任せし船を走せし程小其疾た支矢を射がて三四の
間小數百里を過る所小忽ち日和斐り東南の空小一朵の黒雲起るとん

る間もわく俄然として悪風大吹出し逆浪山の如く起りて天を漫し船と洶
上洶下とふど水主楫取大に發死急小帆を下り地方へ寄ると働けども叶
かこ船小悪風の如く吹舞され今や此船海底小沉じ重く入るる小舟中
の上下顔色如栗あや底の水屑と成ると強だ感ひ生じ心地小あやうく小舟
空海和尚ハその難風逆浪とも恐るる手小密印を結び端坐して自若と
して脚坐する衆人の同悲むを見て哀愍の心禁じがく稍座を起り船の艦
小立出りの高声小何小八龍王よき我遠く求法の如く入唐せし身の
成佛得脱を求ん為るを普く人天會歎魚魚小いる近甘露の法味と得よ
しめ未代濁世の一切衆生をの済度せん大願かり傳聞ハ才の龍女世尊の妙文と
はびく成佛し永劫末世を佛法を守護せん誓願を多しと然も其誓言の如
此船を過ちて本國へ著り我無支小帰朝せん願求鎮護の為一大伽藍

を建辛一衆生消度の法燈を灯籠と誓ひの不安禪師より授けり。南天
 竺龍猛菩薩傳來の三股杵を取申し心中祈念し此宝器の由り処伽藍を造
 り立せんと天に向ひて抛ちて思儀ありし三股杵ハ飛鳥の如く空を翔りて杏
 東方へ私去今を荒吹し惡風漸く吹止高浪鎮りて船穩ふ成れし真人逸
 成を首より船中の諸人蘇生心地て是ひし空海上人の法徳小依て万死と免
 是一生を得ると怡び一日合掌し空海和尚於て禮拜し多斯て風浪収りて
 追風吹て船平ふ大洋を走り平城天皇大同元年十月十三日筑紫太宰府小者
 船一々れも真人遠成即ち空海逸成と太宰府へ請入る船中の時と休し其身
 唐帝の回報を都へ奏聞せんる出幸し空海和尚唐土へ授けり。經卷佛具
 を二卷小記録し真人遠成小言傳て都へ上されり。斯て翌年大同二年正月空海
 和尚橘逸成と俱小太宰府と發足し都へ上り禁廷へ参内ありて歸朝せし旨

と奏聞し前小記録と奉り如く唐土へ得る所の新經の經卷二百四十二部梵
 字真言の續等四十二部論章三十二部佛像十軀佛吞九種慧果阿闍梨
 より附囑の宝物十三種。されも金剛の標珠玉の軸小莊嚴と及せを奏献
 ありを平城天皇大に睿感在り。無更帰朝し多くの重宝と献せし義
 を御褒賞ありて種々の賞物を賜り傳來の真言密乘を天下小流通せし
 此の旨旨と下され高雄の神護寺と給ひて住侶せしめり。此時橘逸成
 小も入唐勤学の功を御賞美ありて是又種々の御恩賞を下されり。去程小空
 海和尚高雄神護寺小住し専ら諸弟子と教屬し。天下小真言宗と流通せ
 んと昼夜心神を凝しめり。是朝廷小平城天皇御多病小依て空位を
 春宮小讓らせし。平城の旧都へ遷りし其嵯峨天皇の御年とわす。年号も弘
 仁元年と改し内裡の諸門を悉く修理せし。工匠の功已小畢り。東西の門

乃額ハ嵯峨天皇御手づり龍管を揮ひて宸筆と下りぬ此方の額ハ橘の犬
 夫逸成不勅して書せぬ南面三門かゝる應天門の額ハ空海不書せしむべ
 と勅詔下りしを空海和尚謹んで勅命不應じ筆と添て四面の額を書きま
 ぬ其筆勢鸞鳥鳳碧落小翔るがごとく龍螭蒼海小游小似く張芝義之も
 妙を奪れ鍾繇蔡邕も愧を懐ぢくといふを然不如何なる更小や應
 天門の額をもちて後緒人是をよんぬ應の字の上の圓点を書目落されしを
 諸人密私給空海わりの能書も應の字の点を落されしを空海も筆の誤
 りありと辨辨したるふと和尚の弟子達聞けし思ひ師小向ひて應天門の應
 の字ふ点をちのむざる一御所存ありての御事やと問ふれ空海師微笑し
 ぬ何の所存もあらずと後より点をかんと思ふ小ちと失念せたりとれども己
 不掛る額をとり御まきんも煩はし其後して点を加せしとて硯筆と持しと

應天門のち行とるふと諸弟子達不審し梯子あどけりて点を加へぬふや
 と後不從ひ行て入るふ空海和尚從容とて門の辺へ寄る筆と執り墨
 を合せ高く門上の額を臨み筆と擲ちぬ毫釐も狂むと後字
 の上小圓点を墨墨黒小少筆其後下落し筆勢をかりし是を見物せ
 し弟子達其餘の諸人あつと斗小感嘆し実も不思議の名僧ふとを賞し
 たる此義層聞小達し今小始め空海が神筆ふと深く層感在し即ち官
 中へ召し御賞美の上より多くの被物と給りし後代まで弘法の投筆と稱す
 此更なり和漢兩朝の能書者ともなる空海和尚のてく五筆と揮ひて一時小
 五行の書とかり或水面小詩を書し今も筆と投て点を加るホの奇更を
 前代未聞と稱す後代ふとて紀百技と入空海和尚の書ふい皇嘉
 門の額をよる其筆法力士の跋扈小似ると辨辨したる其夜の夢小三頭

羅刹来り権者の筆跡を引く罪人を罰せよとて百技を鉄の索より強く
 縛り管を揚て散く小筆を多しとて百技苦痛不堪の罪を懺悔し免れ
 と注謝せし鬼どもより管と止まらばと解救して何國ともなく去よと思
 忽ち夢の覚るる其より後五林瘴で生涯瘴人と成るとぞ又小野道風
 と空海和尚の書のひ朱雀門の額中び大極殿の額の文字とて朱雀
 門のありて朱雀門大極殿とてんを大極殿なりと誹り笑れんを忽ち左
 右の腕痿痺とてそれより筆と執て書とて自在ありと成るとぞ然るも絶世の能
 書たるを慄ひあが書れり千跡以前より却て筆勢奇絶の足えり世
 の人道風の慄筆と賞美せりと之を彼世尊寺藤原行成卿空海和尚の千
 跡を深く尊敬して其書風を學び遂小日本三跡の一人と異國まで筆の名
 譽と傳へる管原道真公も空海和尚の筆法を慕ひ學びて是より能

書よふれよと高うまのひより是は且むたて空海和尚ハ高雄寺の幽静なるを愛
 一の内裡小法務あるの余日高雄寺の住のひるるる来高雄寺和氣
 朝臣清大呂宇佐八幡宮の神勅を蒙りて建を所の道場にて神願寺と
 号せ成後小神護寺と改められり然も空海和尚歸朝在後和氣清大呂
 の息男真綱大夫空海和尚を深く信仰し高雄寺の住侶とせり思其
 由を朝廷願ひん即ち勅許ありて偕と高雄神護寺と空海和尚小給り
 一たり然も寺門の額いよの額を改めざんを真綱新額を造高雄寺寄
 附せん朝廷其旨と奏達し額面の書空海和尚の深筆と願人と新額を従
 者小齋一高雄寺へ赴れ多折も大雨の後中清滝川の水漲り溢る溪川の橋
 流し落渡る便な如何せん指豫る小空海和尚ハ高雄寺小在て暗小
 真綱が額面の書と望む意と知覺し弟僧小華硯を持せて坂の半途迄

下り真綱まづな向むかひ高たか声こゑ。貴き卿きやう當あつ寺てら新あらた額がくを寄よ附づせまんと是これをと持も持も参まゐり
 一段いちだん始はじめ入いり。出でる洞どう河がの橋はし落おちれを渡わたりゆ人ひと更さらも煩わづらひる事こと。空くう海かい是こゝ所ところより
 額がく面めん小せう拙せつ筆ひつと揮ひひいんあつ。其その額がくを高たかく上うへて持もせり。仰おほせ。真ま綱づな空くう
 海かい師しの額がくの文ぶん字じと望のぞむ意いと早はやく察さつ知ちせり。と驚おどろ嘆たんひあつ。此こゝ處ところと彼か所ところと洞どう
 一いつつ小せう隔かくとふ。彼か所ところより額がくの文ぶん字じと書かく。如何いかある方かた便べん小せうやと不ふ審しんか。權けん者しやの封ふう
 めれをと。從おん者しや小せう命めい額がくを高たかく指さ上うへて待まち居ゐる。空くう海かい和わ尚かうハ谷や川がわを隔かく其その間ま
 送おくる坂さかの巖いわ頭かぶ小せう之の後のち弟あに持も持も筆ひつと執とて墨すみと合あせ。額がく面めん小せう向むかひて毫こを
 揮ひひいん小せう不ふ思し議ぎや其その墨すみ雲うん霧きの如ごとく空くう中ちゆうと起お到と。額がくの面めん小せう神かみ護ご國こく祚そ真ま書しよ
 寺てらと墨すみ黒くろ小せう著ちやくと筆ひつ勢せい類るいを書かく。書かくひくも小せう。真ま綱づなを先まに合あ筆ひつ嘖いんと
 感かん嘆たんとる声こゑ洞どうの水みづ音ね小せう雜ざつりて少すこ時ときハ鳴なり止とまり。真ま綱づなハ眼がん前ぜんの奇き特とくと見み
 て屢る讚さん美み。かゝる不ふ思し議ぎの御おん墨すみ跡あと天てん賢けん小せう備びて後のち寄よ附づひ。とて。拜おん詩し

て都みやこ帰かへり参まゐり内うちに在あり。次つぎ弟あにと奏そう額がくを睿み覽らん小せう備びれを帝てい御おん驚おどろ嘆たんま
 しく先ま達だつの投な筆ひつと今いま度たびも谷や川がわを隔かくて書かく。渾こん更さら小せう凡ぼん夫ぶの及およぶ所ところ
 小せうあつ。実まこと小せう佛ぶつ菩ぼ薩ざつの再また誕たんとあはせり。と弥や脚きゃく信しん仰やう増まひく。斯かくて
 真ま綱づなハ件けんの額がくと再またび高たか雄ゆう寺てら持も持も寺てら附づり。今いま猶なほ右みぎの額がく高たか雄ゆう寺てらの空くう
 去さ程ほど小せう空くう海かい和わ尚かうハ高たか雄ゆう寺てら小せう於おて諸しよ弟あに子こと教きやう導どうれり。程ほど小せう各かく稍しやう金きん胎たい兩りゆう
 部ぶの深ふか理り小せう達だつせり。今いまハ天てん下か小せう真ま言げん宗そうと弘こう通つうせん。弘こう仁に元げん年ねん三さん十じゆうの春はる参まゐり
 内うちありて真ま言げん宗そう流りゆう通つうの義ぎを願ねがひ。即すなはち身み成なり佛ぶつの理りを奏そう聞もんひ。ひこれハ帝てい其その法はふ
 を尊たつとび。ひまが猶なほも諸しよ宗そうの高たか僧そうを召よ集あつめり。空くう海かい願ねがひと。真ま言げん密みつ
 乘かうの宗そう派はいの義ぎ可か否ひ如何いか有あるか。と勅ちやく向むかせ。是こゝ小せう依よて諸しよ宗そうの碩せき德とく達だつ清せい
 涼りやう殿でん小せう居ゐ流りゆうて空くう海かい和わ尚かうハ人ひとを對たい人ひと小せう。抑おさ欽きん明めい天てん皇かうの御おん宇う小せう佛ぶつ教きやう幼わらわて我われ朝あさ
 小せう渡わたり。聖せい德とく太たい子し隆りゆうハ佛ぶつ法はふを弘こう通つうひ。ひより以もつと来きた代だいの賢けん哲てつ入に唐たう渡わた天てん

各佛法の真理を学究め七宗の行果と本朝の傳へとの未だ即身成佛
 の法を究み公定せりと銘し学力を尽し辨舌浪と起論難と研法論の
 空海和尚の屈ふこと。其難問を言解ゆ。又更詞義明して并舌懸河の
 ので一言半句も滞りあるを満座の寂僧理小壓して口を黙く玉を廉の
 内の睿聞在と帝と首より並居る月卿雲客まで空海和尚の博識各
 弁と感嘆し満殿さ寂寥と静まりける。時小空海和尚の南方小向ひて契
 印と結真言と誦と秘觀を凝し肉身忽ち毘盧遮那佛の尊容と
 變じて八葉の白蓮の上坐し白毫より赫たる光明を放しぬ。殿
 中さあがら琉璃の妙界のどく光輝たる香復郁と薰じ日るる中敷敷の
 僧綱大少孩れ各陛下下り走り下り首と低身と平伏て敬礼し帝と先とせり
 並居る諸卿も思ふと合掌礼拜ありける。少時あつて空海和尚結し印を

解て本相小還り再び生佛無二の真理を説しこれに衆僧も感伏して即身
 頓悟の疑を解君も脚感斜あつて遂小真言宗流通勅免の倫旨と給るれ
 小空海和尚大少始に鐘んで頂戴しこれ君の脚信仰以前十信
 女脚宮妃緒宮方公卿大夫まで真言宗を導び袈裟衣佛具其餘財帛
 を寄附する人日夜絶間なく一宗の繁昌天下の耳目と發りける

東大寺蜂怪南園堂建立 高野山開發伽藍造進更

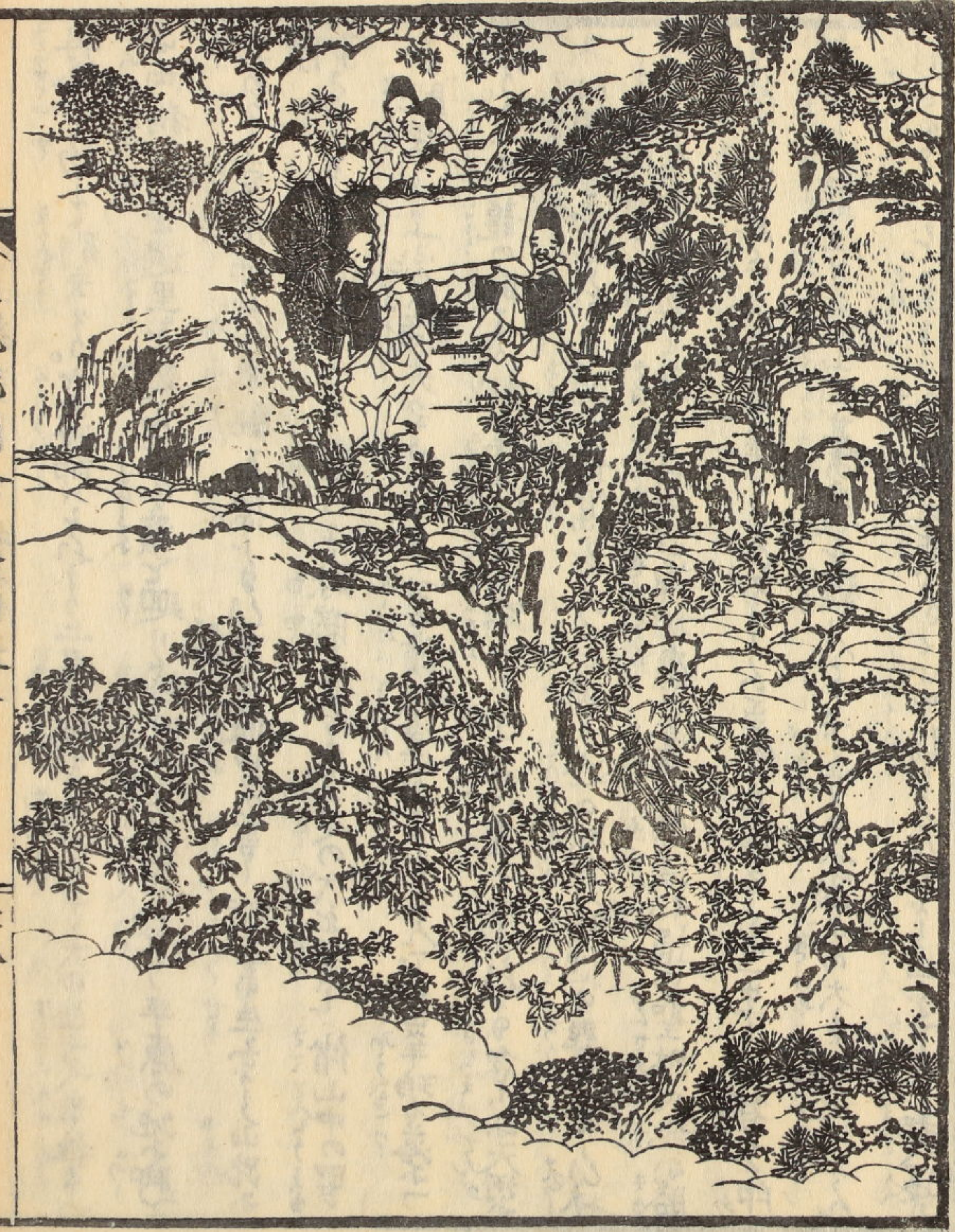
南都東大寺の聖武天皇の御建立して重れ勅願所を代り高徳の僧と擇
 て別當とせられ寺中の学寮小勤学とも僧多し天下小双あし敏宗昌の大如監
 たり多小弘仁二年の比大と四五寸許なる山蜂幾百ともあつて出来
 りて寺中の僧俗を蝨虫たるふと蝨虫より者小忽ち大少脹て痛疼堪
 なく惣身大熱出煩悶し終小死亡小乃ふ者數十人小われ諸人肝

を消種く小追拂へも却て其徒小逐ひく蠶多程おとてわきて逃
退た家小引籠り昼六出る更け夜のそ出緒用を弁らるる小後小
家く小乱入て蠶多の今蜂を防ぐを林か僧俗とも寺中を
逝去へ他所移住邂逅寺法を守僧弁を抛て残り苗やると
どもそれ蜂の害を防がの学業漸く獲まき法脈や小絶かん
くくも小ど皆此寺衰滅をた大魔縁かりと軟たあり帝其由と
召て宸襟安うも空海和尚を召まき你東大寺小移り住て悪由乃
災害を退けいとも即ち東大寺の別當小任りぬはり是小依て空海和
尚東大寺小住りて住のいれを不思議なるふも夥く群り出
大蜂一疋も出る更け蜂の禍ひ忽ち小止る小ど緒人奇異の思ひを
是ひく小空海和尚の法威小するところかりと感ド退散せ僧俗

中寺中へ還り任り空海和尚東大寺小任職の間小種々の法要を定
め置のいり今西室南院亦其四跡かり茲小大職冠鎌足公の齋孫小
左近衛大将正五位藤原冬嗣公と中々空海和尚の道德を崇び師檀の
契り浅うもやが真福寺空海公の建立して藤原の氏寺と定められ
んむ猶も家繁栄の為ふと空海和尚と相議り弘仁四年真福寺
の寺中小地を見ま八角の圓堂を營建空海和尚直作の三月六日不
空罽索の觀音の像を安置して修行持念せしむ今南圓堂是之
右の南圓堂修造のうら夫の中一人の老翁有るる一首の歌と録む
補陀洛のいみの岸小堂たて今ぞ榮へん北乃藤波
とよも其後行方まき成り空海和尚冬嗣公小語りて件の羽春
日大明神より小姿と現し藤氏の繁昌とて我を告めいりわると

仰せらるるほど冬嗣公大い喜悅ありて春日明神幣と捧げ神恩を謝し
 のひたるも果して子孫繁昌一表門富栄多ると芽出度うくる去程
 小空海和尚祈願の如く真言宗天下小流通一を望み足むと歡ふ
 更限りなく其成就も帰朝の砌り船中かき難風小遭如藍を建させ
 と誓ひ三股杵を抛ち一更を昼夜忘るるもその人も法の繁敷小
 暇なく空しく數年と過しひたるも今已小宗成就一を望み彼空
 器の留る地を尋んて畿内近國を經歴しひたるも大和國宇智郡小於
 て一人の獵夫小往逢りひ其人表と見えり骨相異形小尋常あり身
 材高く筋骨逞しく面色黒く両眼尖く光り身小藤織の衣と著し脚
 小革袴を穿れて太刀と帶弓矢を手挟み黒白二足の獵狗を牽り空海
 師御覽いて獵夫小對ひ其許小且夕深山幽谷と地廻り山々峯々の案内

よく知つち我が空海して靈場を求め如藍を造立とて大願ありり近
 國小於るる靈山ありて教られしと仰えり獵夫笑て曰仰のて我が紀伊
 國の獵入りて此年来近國遠國の高山深山に登らざる所もけり其中小最上
 の名山の所紀伊國伊都郡の南小當て三面小山列り巽小開けて一流の溪水東
 小流し峰從登深きも羊腸さの險阻をり法由人を蟻と猛獸人を
 害むと絶頂ありてを廣くたる平地ありて白日此の雪雲變夜陰ハ靈光四
 方小耀々如藍を建立しと小小純小究竟の名山かり和尚り彼山を開た如
 藍を造立ありて心あり六日本第一の佛場とかりしなり我もまた之を
 滅罪のて一臂の力を助けたまふもあれ和尚り彼地の案内を知りて我
 此二足の犬を貸すありしなり此大く山路の導引をまかりしを率連のて獵
 狗を貸すありし空海師深く悦ひしを厚く礼謝を述て犬を借りしを獵夫ハ



皇統記圖會卷之三

廿八



清滝川と禪
空海願の
文おと書

山手
柳川手依画

皇統記圖會卷之三

廿七

再會と約して別去り。空海師は二足の狗を先か立てて犬の生方へ歩む。小西狗の野を過里と越山を不溪と廻り遂に一座の高山に登り平原の地脚止り。空海師大の奉勅を感じて實に獵男の言に如く畜生か山路の列々高山の路をよく知るを殊勝かんとて二足の犬を賞し。諸山中の野を眺望し。小實獵夫がせしむる葱嶺銀漢をさそえて白峯瑠を浴びつ。東西龍の卧る如く南北虎の踞る小似て。浮查に乗せられ忽ち天河入仙薬を嘗せられも暗に神窟をさぐる心地。峰の松風頻悩の塵をこぼし林の鳥声を无明の睡を覚し。真に修禪相應の靈地佛法弘通の聖跡此地の勝る所や有らばとて只管嘆美し。ひらひらの古殿は目標のくまの松符を印書此上六都上り當山開基の義を願んとて下山し。二足の犬を何地行ん影もいんと。是より不思議の更にあつて心中行りしひらひら山を下りて都へ還り

上の弘仁七年六月十七日表と奉りて紀伊國伊都郡の南の山を入定の地へ下り給ふ。人更を願ひ。天聽滞り。七月八日勅許の旨と下り。是より依て空海和尚徒弟泰範實惠も従へ。彼山へ赴き。官符を以て人夫を募り。山茂開をせらる。以前の獵夫も来りて人夫とも。草と朽樹を代土をあり。運びて夫を助け。空海和尚其旁に射し。且靈地を指示し。其夜空海和尚の夢。條件の獵夫有。姿引く衣冠正しく威儀刷ひ。出現あり。空海和尚向ひ。師信力堅固。佛法弘通あるが。我は獵夫の姿となりて。此靈山を教示し。真に此山の禁天野。鎮座ある丹生津。比咩命の子高野明神なり。と告め。光を放て去り。又て夢覺。空海師感涙。衣の袖を沾り。いさむこと。彼獵夫八九人。かと思ひ。小果として此山の守護神なり。在り。迎

其跡と礼拜し神恩を謝し是より山を高野山と号け南山一社を以て高野大明神と鎮祭り又林蔵の天野丹生津姫命と鎮祭り俱高野山の鎮守の神と崇めはるが又不思議なる山中と切拂せられ樹木の中小株の松あり先年帰朝の節拗ちり龍猛菩薩傳來の三鉢儀を懸りたる空海和尚是とんひく愕然と感涙ふむせし此靈器疾より此山小苗り伽藍を建ぬる地をとりて彼高野明神獵夫と化して我小此也と指教の時昼と紫雲たがひた夜に靈光耀々と告りいも此靈器の奇持あり秘教相應の靈地なる更是とて是を以て歡喜踊躍の堪むる三股杵と取て三度押頂れり即ち今猶高野山の宝藏小納り松三鉢の松と号して今世でも繁茂せん斯て草菴成就され空海和尚本心は是より都の法教の暇ある時高野山の菴室に任て行ひ燈りのいと

其後弘仁十年嵯峨天皇御悩み疾のゆゑ醫官の面々肺肝とて良方と考て御藥と勸め奉りられも更其驗なくされ空海和尚を召して加持せしめ所願御悩平痊在り是より依て睿感斜るは其御恩賞して高野山の伽藍を速小建立得るを勅詔を下しはるが緒卿倫命と奉り番匠治工數百人の工夫を遣り奉行頭人諸職人を励し昼夜を捨す堂舎の經營と急がるる也又遣業を以て堂塔樓閣房舎の造玉と磨りて造堂し空海和尚の指揮に従ひ南天竺の鐵塔小擬して高さ十六丈又室の浮屠と建たるは二層の臺八霞中小輝れ九重の輪ハ雲外小鮮り塔の中ハ丈四尺の大如來の佛像と安置し其余八尺寸の菩薩の像四軀を居置猶も山の真深く入一院を建入定の室と定めし今この真の院の御影堂是也九高野山開發弘仁七年七月より山を開けはる十年の其佛閣僧房鐘樓鼓

樓大塔山門いづるまを盡く成就しを日ひ年五月三日ろくごのひ落慶らくけいの法ほふと執行しれ
高野山たかのやま金剛峯寺こんがうぼうじと号なづ日本にっぽん第一だいいちの名刹なむせつと成なりて一ひと度たび参詣さんぎする輩たぐひ八十はち五ご
逆さかの罪つみを滅めつし三惡道さんあくどうの苦患くるわんを免まぬるに成なりて佛ぶつ得とく脱だつするに支し疑ぎひかりとなり

因よ曰いは高野山たかのやまの伽藍がらん修造しゆざうのせし地ちを堀平ほりひらがとりて石いし金龜こんかひを堀出ほりだし内うちと
檢あめられし長なが五ご尺せき幅はち二に八はち歩ぶの密劍みつけんを藏かくして空海くうかい和尚おしょう是こゝを得えて深く
感かん歎たんして此山このやま素すり古仙こせんの遊あそび所ところなるに支し此密劍このみつけんを以もつて知しりとて劍けんを

秘藏ひさうして後年ごねん勅命てふめいに依よりて天覽てんらん小備せうびられし其その後のち朝廷てうていに留置りうぢせしり
然しかし頻しばしば小怪異せうかいぎの支し續つづきを博士はくし小せう止とせしりとして高野山たかのやまの劍けんの宗そうたるに
奏聞そうもんするに銅どうの筒つつ小納せうなりて曰いはすに高野山たかのやま返かへしていふとす

東寺賜とうじたま空海くうかい西寺賜さいじたま字敏しん
空海くうかい字敏しん法ほふ方ほう優う劣りやく方ほう條じょう
弘仁十四年正月大納言正三位兼右近衛良房こうにんじゅうしやうだいなごんしやうさんじいけんみぎきんゑらふらうをいて空海和尚小洛の東寺と給

りりりり時とき小南都せうなんとの守敏僧都しゆみんそうどう小洛せうらくの西寺さいじと給たまりて柳東寺りゆうとうじ西寺さいじ古乃鴻このかう
臚館りよかん小せう唐土たうとより来朝らいてうする使者しやしやを侍しやく饗食じやくじきするに旅館りよかんなりと相武天さむてん
皇みかどの周しう宇う小寺せうじとなりて東寺とうじ西寺さいじと号なづられし是こゝ平城へいじやうの東大寺とうだいじ西大さいだい
寺じ不ふ准じゆんせしたりと空海くうかい和尚おしょう東寺とうじと拜領らいりやうありて則すなはち寺じ中ちゆう准頂院じゆんていゐんを建た
るに唐土たうとの香龍寺かうりゆうじの法式ほふしきを效まねひて毎歲まいさい二序にじゆ灌頂くわんていの法ほふを執行し行ぎやうれに惠果ゑいこ
禪師ぜんじより付嘱ふじゆくせしるに健陀國けんたこくの穀子こくしの袈裟けさを日ひ念珠ねんじゆ唐帝たうていより拜受らいじゆの
珠數しゆすう唐土たうとより清来しやうらいの二百餘部にひやくじよぶの金剛乘こんがうじやうの法ほふ又また三圓相承さんゑんさうじやうの佛舍利ぶつせり佛像ぶつざう
亦またと盡じんく大經藏だいきやうざう小納せうなりて永とこく當寺たうじの付室ふしむとなりてせしるに凡おほ真言しんごん三部さんぶの秘經ひきやう
の中ちゆう小東寺せうとうじ金剛頂經こんがうていぎやう金剛頂經こんがうていぎやうの道場だうじやうとなりて專せんらん金剛界こんがうがいの法ほふを修しゆ
秘密曼荼羅ひみつまんぢらをもいて空海和尚自作の佛像二十軀を安置するに多おほくくあらはす
秘密傳法ひみつでんほふ弥勒山みらくやま普賢ふけん惣持院そうぢゐん金光明こんくわうめい四天王しやうてんわう教主きゆうしゆ護國寺ここくじと号なづせしるに

空海が殿中にお在りて守敏の法力の行れざる更や有らば此六兩僧が法力
の勝劣を試し見んと思召空海は向ひの並む和僧は彼所の簾内小隠り
ひい守敏を召寄て法力を絶きしと詔ありて即尅官人小命りの守敏僧
都を召れり是より依て空海和尚の側御簾の内小身を隠して守敏の
わふ氏待りし時斗ありて守敏僧都内せられし帝は祥と是を知る御
風情も浄手の湯を持ちて宣し兼て内勅を奉りて内侍典角盥湯玉の
とくりの熱湯を汲湛て捧げ出君の御前より上りて帝御覽し是は殊の
外湯の熱れと宣ひし守敏を御覽し和僧は何時のわづ来りしや幸乃
折りたり此湯と冷し得きせと勅りし僧都唯と領掌し袖の中水印と結
りれども更湯は冷きりり守敏是は如何とて再び咒語を唱へ印と結あをせども
尚少しも冷されぬ帝召を召て水と入きりて御手と浄めり又昨日とく火鉢

小红炭と堆々積ると數多召寄りし玉座の両辺に置せし守敏と御物語在
りし火氣宮中充て帝御額小汗を流しり守敏先中徴を又袖中小水
印と結りれども火氣消せし信懺んわたりり守敏二度の不覺心中に女
を是は何なるゆゑかと我が不審暗申を忙然とて惆果る時側乃翠
簾の内より空海和尚従容とて立出の守敏小向ひて如何や僧都各月御前
より星辰光を絶しと仰れし守敏大い赤面し言りるも能くも手もち
悪く御前退出せしるる心中空海和尚を深く恨み西寺歸りて心快く
して樂し何卒空海小耻辱とて此恨を晴さんものと嗔怒の熾る心と焦され
る是を兩僧遺恨の始と云われり

嵯峨天皇御讓位

守敏空海初兩争行力條

弘仁十四年の嵯峨天皇右大臣藤原冬嗣を召れ詔しひくは朕己未年

て朝政を聴不頼し依て帝位を太子小徳人と思へり卿より譲位の義を執
 たりしひいと宜ひれを冬嗣公謹んで奉りし古より聖人を聖人を知とせり
 今陛下仁徳唐堯も優らせり皇太子大伴親王より虞舜の聖徳もあさ
 くおまされを万機の政教を付託させり皇太子大伴親王より虞舜の聖徳もあさ
 るに然も近年諸國凶作續れ万民飢餓の患小昔も時節おていを上皇
 在と上君より太上天皇とあせむるに士民の貢物皆て民の歎れを成
 いぬる備て願くは今皆く年の豊熟を待せりて後御讓位か万
 民の大幸なるを素りいさし御養老と御齡おてりてせむるに御讓位
 の御更さの晩しとやめていさすと啓奏ありと帝より口御が練申理有と
 りとも太子の賢明朕もする勝れを帝位を傳る万民の為とおかり近年五
 穀不熟なる朕が徳の薄たをいれを太子位お即を年豊饒小飯と朕が心

己不決せりて敢て練を用ひるを嗣公も此上力たりと群臣も君の勅詔を
 つく遂小皇太子大伴親王を十善の定位小即より人皇五十三代の聖主と仰死
 奉らる此君を淳和天皇と称されり即ち桓武天皇第三の皇子小即母小皇太
 后旅子と藤原百川の女お在り御即位の大礼を執行れ平城帝と前の
 太上天皇とや嵯峨帝と後の太上天皇と尊号なるの年号と改め天長元
 年と改えありり借嵯峨天皇の皇子正良親王と春宮小立り其年乃九月
 小後の太上天皇嵯峨の離宮へ遷りかゝて中納言藤原三守とて其義と淳
 和天皇へ奏聞させりこれを新帝勅許在り右司小勅詔を下りい宝篋車及び
 供奉の公卿前隨後従の武士を定め行幸の儀式厳重小整へたりと仰出され
 ると上皇固く御辞退かりしを王上再三勸請りとも承列かを遂小
 前駟兵杖の儀式を差止られ御馬小召れ供奉の官士少々召連りい密小出

小や七日満すれども一滴の雨も降ざりぬ。大小新りの入来り天文易術小達一更
 心袖中卦を立天眼通の法を以て見ゆ。亦雨の不降も理り守敏諸龍を驅て瓶
 中小封に竈一也かりぬ。空海師守敏が悪念を増と徒弟小告て曰く我丹城を凝
 一雨を祈まども雨の不降も守敏法師其身の修法普く雨を降まも更不敏を耻
 せと却て此空海を妬して雨竜を驅て封に竈雨を降まると巧むたり。昔天空の一角
 仙人も龍神を恨み瓶中小封に竈て世と早魁せり。美人の色小眼を奪り且
 酒を盛まると法力破き却て龍神の爲小宗を受て死せりと。守敏も例を知
 ぬが一時の妬心より空海小耻辱を取せん。諸龍を封て雨を止むる偏執の念も
 浅猿久抑天子恐妻も空海をと雨を祈らせり。六敢て脚戯ふあも。天下万民
 の困苦を救はせむん。の聖慮して在るとを私の遺趣を以て上二人より下億兆
 の歎歎願まも。更天下の罪人佛法の悪魔かり。それ天小向く唾を吐天と汚きん
 と

欲をもも天を汚し更蝕せど却て其身を汚すと。將小守敏が習かり其罪已小
 するもの。渠小龍を封むるカあれ。我より雨を呼法力あり。やハ此神泉死の池中
 小善女龍王とて阿耨達池の龍王の脚女も。守敏も人の行カも。八驅更蝕す
 始より守敏が巧むる。巧むる爲更を去る。疾少の善女龍王を請召して雨を乞ふ
 を不知とて空しく日と重なり。又よ一雨は過さず膏雨を降して普く万民の歎
 れを怡び小及し得まると。朝廷へ二日の日延を願ひ。芽を結んで二の蛇
 形を造り池辺の檀上小祭りて再び真言秘密の聖法を修し。丹城を抽て祈
 る。更一日夜小及ひぬ。忽ち池中より其長八寸むるの金色の小蛇出現し。檀
 上の龍の形代一丈の頭の上小乘り。真雅實惠以下の高弟の眼小ハスえ。其
 其余尋常の僧す。六守護の公卿武士た。八是で入る更蝕せど空海和尚神
 龍の出現を以て大い歡喜あり。倍精神を勵て祈む。神蛇は首と伸して

虚空こくう亦も向むかといくく俄い小風こふう颯さつと吹下ふきくだ密雲みつぐも山の端たてより湧起よわぎると比ひく一いち声せいの雷らい
 鳴な天外てんがい小裏こりたんとく黒雲くろぐも一天いつてん小満こまん風勢ふうせい倍強ばいじやう雷電らいでん弥厲みやれいくして暴雨くわうう
 盆ひんを傾かたむるか如ごと降出ふりだくく檀だんの周しゅう小扣せうこく僧俗そうじやくも雀躍せつじやくて悦よろこむるか
 此時このとき西寺さいじ小守せうしゆ敏みんが秘封ひふう破やぶきく瓶びん中の諸しよ竜りゆう虚空こくう亦も起登おこぞうくく小雷せうらい雨うを
 降ふくくく雨勢うせい公前こうぜん小十倍せうじゆばい浴中よくちゆう浴外よくがいの貴賤きせん老若らうじやく我われを忘わすれ踊舞うまひ恰さか
 声雨せいうの音ね雜まじりて揚あぐくく空海くわうかい和尚おそう之の念願ねんがん満足まんじつせりて檀だん下くだりの徒弟だてと
 従したがへん林りん廷ていへん帝てい大だい小せう睿ずい感かん在あり大僧だいそう都と小住せうぢゆせられ若わ年の采地さいちを給たまり
 くるをく空海くわうかい和尚おそう再また三辞退さんじたいくく勅ちやく許もとわれを己おの妻つまを得えむを拜受らいじゆありて天恩てんおん
 を厚あつく謝まがりの儀ぎ依よりて東寺とうじへ歸院きげんくくの去程さうぢやう小甘雨せうかんう降ふ更さら三さん日にち夜や
 小余せうまりの五ご畿き七道しちだう雨あめののぬ里ぬりもの潤うるる池いけも水溢みづあふき旱割ひざりる赤土せきど
 も潤地うるちとのわりのるを万民ばんみん腹鼓はらづみをのて恰さか勇ゆうくの空海くわうかい和尚おそうの法ほふ力をちから使つかつて

昔世むかしよの活いき如来にがやうらいと尊たうと真言宗しんげんそう小皈依せうがいをの者もの幾億いくえい万まんの數限かずかぎものく愈い空海くわうかい和尚おそう
 の法ほふ義ぎ世よ盛人せいじん小せう乃の是こゝ相あ及あて西寺さいじの守敏しゆみん僧都そうとハ空海くわうかい和尚おそう小不せうふ覺かくを
 取とりて諸龍しよりゆうと瓶裡びんぢり小廻封せうかいふうくく小善せうぜん女にょ龍りゆう王わうの威い力りき小せう忽とち秘封ひふう破やぶきも
 の針巧しんこう画餅わへいとのりの空海くわうかい和尚おそうの法德ほふとくをの知しりも不ふ知ちもの讚美さんびくの守敏しゆみん僧そう憤ふん怒どの
 念心ねんしん小満こまん腸ちやうも劫火けつかのの不ふ燃もゆるをくく噴嚏ふんていの焰消えんしゆくく此こゝ上うへ空海くわうかい和尚おそうを
 咒咀じゆす殺ころしの前憤ぜんふんを散さんせんのと一時いちじの嗔怒しんどより大惡念だいあくねんと生なじの寺てら中ちゆう小場せうぢやうの護ごヲ
 檀だんを構かまへ上うへ檀だん小孔せうこう雀明せつめい王わうと祭まつり藁わらの人形にんがたを造つくりて前まへ小立せうたち注連しゆぢを張はり供物くぶつ
 を調てう護ごヲを焼やきて念珠ねんじゆ揉もみを水穀みづこくを断つりて心こゝろ不ふ乱らん小祈せうぎ里りをの護ごヲの煙けいを空くわう
 中小ちゆうせう渦卷くわま上うへり咒文じゆぶんを唱となる声こゝろ冥衆めいじゆうを護ごを許ゆるして物凍ものこもの恐おそろくくの空くわう
 海うみ和尚おそうハ斯ごとくも知しりの召よびて一いつ朝あさ庭前ていぜんへ出でる四方しやうほうの天てんを見みるの亦も西寺さいじの方かたもの
 怪あやしの煙けいを上うへり風かぜ小逆せうぎやくて東あづまへ向むかひの塵ちり多おほくの心こゝろ訝うたがりのひて私わが房ふものくく占うら



空母母



女人禁制と
犯す
空海の
母種と此
怪異

の守敏僧都の御身を咒咀調伏す護摩の煙なる支頭をこれぞ我
 も災害滅除の法を修せんと徒弟余命と祈の檀を毀させ不動明王の尊影
 を祭注連幣串種くの供物いりるまで法の如調へを檀上座と構う護摩
 を焼く水晶の珠數中りて不動の真言を唱へ丹誠を凝くこと祈りひるされ
 む當時天下小名高れ権者と名僧の行力競く多年修学の功を尽し肝膽
 を砕け祈り合れり程小西寺の護摩の煙へ東寺へあびき東寺の黒煙を西寺
 へ向ひ双方の煙雲の下く虚空を翻満し凡夫の眼もこと遮れぬ双方の天部万眷族
 東西の雲中小充滿して互射違る飛箭前ハ雨の脚より敏く昏日の影を曇る
 夜八月の光も朦朧として傳帝釈修羅の闘ひも斯やと見え津うらうら。去
 程小西僧二七日間息を吐き祈合る程更勝劣ふらむ何時果會りとも見
 えざりたれど空海和尚心中小恥と一針を糸出の鱸魚とい魚を多く取寄さ

せ寺内の庭に焼きたるもの其嗅氣をわたり死人を焼かす如く空海和尚の風
 を呼法を修し又も忽ち東風吹散て魚嗅を西へ吹送りたる小と西寺の守敏
 此嗅氣を嗅て偕は海我行法の為落命今火葬せしむるあんと大和
 慢心生じ精神強し時珠數を標止一息吐き吐く小忽ち呼吸の息断
 絶碎地して其伏祈の檀上座斃死しるる。されど今の世に鱸魚を家内
 小焼きたる更し言傳々。嗟乎愚あまふ守敏一朝の妬心より多年練修
 せし佛道の本意を忘る空海和尚の如き善知識を咒咀せん却て其身
 を亡滅す更所謂咒咀諸毒藥還著於本人の経文の如し是去りか
 諸龍を封じ困り崇る。慎むを死に噴嚏たり。偕も守敏の弟子僧亦ハ
 師匠が檀上座で頓滅せしめて大の發死薬よ水よと主強に左右して介抱し
 るも再び蘇生しともありをれを為方々屍を収めて守敏が死没せ義を朝

雷雨を犯して登りし隨從の者天変を恐るるに地を匍匐もあらず。又其
 逃下るも有る果一人も母公に従人者なり。母公六足歩て三足吹戻れ二足歩
 て五足跡退りわが尚も登らんらんらん。大雨跡車油を流とぐぐり登り兼
 り所使着不立。武士混浴成り走り来り。此休も今母公を押止大僧都
 の仰ふに當山を女人禁制せしむる登山りの不更熊と頓て僧都脚下あり
 て却對面なりむ之間禁侍せり。先刻より雷雨烈く山の荒れ
 女性の周身も登山りしを山神の咎もあらず。早し禁入脚下あり待
 りしと練れども母公敢て承りたり。高山あれ天物魔縁の類も拙
 ぬを。自余の女人を登山不叶も此山我々の因なる佛場なり。然し其母も妻
 が登山りて妨る魔障もあらず。雷雨時の天変の何ぞ異とせらるる足
 として武士が笛むる袖を振切心強も登らん。亦も山上より暴風強吹風一母公

を洞吹落さんとせらるる母公落されと側の巖の尖を両手ふりて踏止り
 一念力のあも処や思ふと岩の尖を捨られ。今も存と捨岩と称するは是あり
 う天変も母公猶登山せん念止却く心中嗔と生だ。此身微塵
 小あつとも登山せし止と悪風雷雨も屈せど衣服の寸も裂破と白髪散く小
 ち乱れ下折の杖を杖。身命と抛つて登らん。不思議や空を降る雨
 火焔となり面を向らん。母公も因果ありや火雨の為小焼殺され
 んとある所空海和尚来りて路の側なる大盤石を斤半小く押上母公を
 巖の下へ押入るも母公其後阿絶し。花塚名高き押上岩是なり。空海
 和尚母公の絶死を却覽。口中真言の秘文を唱りて頻に風雷雨電なり
 母公息を吹返。四辺を八通。空海和尚の脚息を八上の掌と合。伏拜の
 妻五障の罪深死身を願ず。悪業者の群小鬼を惡場所強て穢んと。已小

火の雨焼殺せん其後ハ夢とも現ともふど廣くと暗た道ハ迷ハカ
 現ハ鬼出來リ妻と離レ何國とも行去如來妻小宜ハハ汝女人の身
 結界の靈山登んせり諸天怒を殺レ已ハ你が命と滅せりえとせりされ
 此後嗔慧の心を慎ミ佛道不可思議の理を疑レ更あれ你空海を我子あり
 と思ハもえ之佛菩薩の應化也。皆く你が腹を借レのとなり必む我子と
 思ハも教諭しハ妻の手とて旧の路導れりて我を夢の覺るまで
 我下山とて脚對面をせんと思ハ少の法教なり果て下山ハ
 者下て下我下山とて脚對面をせんと思ハ少の法教なり果て下山ハ

小早も脚登山ありて。當時も憂苦とんせり。空海が淫念の罪
 たり。怒りて謝のいれ。母も懺悔ありて。妻一時の我慢ハ佛神の脚怒と
 惹出サ。罪深え露脚身の科なり。とて互辭讓あり。相伴て下山の
 多小隨從の男女。林小待。母公の悪心を賀。隨逐せる罪と謝。小と
 母公も衆人の無事を恨。主従も連て天野の菴。著のい。空海和尚と母
 公と別後の脚物結を。此年来脚側ハ在。事な。不孝の罪ハ免レ
 公と謝の佛法の功德の廣大。更と。脚教化あり。母公感涙と止
 ありて。即時小戒を授け。母公脚始ハ限。遂小髮せ。尼と。師も脚喜
 いたれ。召使の男女。小剃髮の義を願。空海曰。尼公の脚父抱
 小女人。と。男。入道無用。と。女子。許。剃髮。許。男子。の。小

来心差止く燈火歸らるるの偕幽静の地をえりて菴室を建御母尼
 公と任つらるる是より尼公佛道心を傾けの以昼夜二六時中勤行
 怠りまを終小七八才大往生一の以多。空海和尚其亡骸を菴室の
 側小葬り脚跡懇小吊ひの以菴室を佛堂とたりて慈尊院是かを
 其砌小不動坂の上小女人堂を建り。偕五十九才の脚年藤原基卿の志
 願小依て万燈會と修せられん。空海和尚深く脚賞美在。燈明の徳ハ
 日月の光小嗣無明の闇を照とん。佛前小一燈を供とん。其功德莫
 大なり。況や万燈供養小於也。現當二世安樂ハ小及と子孫繁昌乃祈禱
 何更々是小勝るべれと仰られ。斯々年月押移り空海和尚六十一才小
 かりり。羊の十月十五日。緒の高弟達小告て曰く。我豫て二百才とせ小住
 て教法を守む所存も。思ふ子細あれ。明年三月入定。都率天の往

生一五十六億七千万歳の後龍華三會の曉。弥勒佛出世の時を待て我又此
 娑婆世界人生を統一切衆生を化度とん。高野山小真岳小附属。東寺と
 実惠小預け小福寺。真雅神護寺。真濟小授と。脚遺言有る。高弟
 達大り。残れ是。何ちも脚更とん。今幾年脚在世。我後小教示せと
 り。願々れ。敢て脚承。猶後の更を脚教。誠有る。程か。其年ハ
 暮明とん。仁明天皇の承和二年。乙卯三月廿日。寅。村本坊。て。結跏趺座。の以
 脚弟子達。小仰。我眼。困る。入定。の期。奥の院の室。送る。大日如
 来の秘印。を結。終小禪定。入の。以。春秋六十二才。在。脚弟子達。各
 繞。彌勤。菩薩の室。唱。居。已小空師。脚眼。困る。各
 悲。長の涙。小三衣。を絞。偏小軟。尊の入。滅。悲。緒羅漢。小異。各
 どの。斯。有果。を。小。脚。乘。小。定。惠。真雅。真如。真濟。

眞紹。眞然。是を拜す。眞の院(接)す。七日の御存忌。殿重小執行の
 御弟子達。七日毎。眞の院。奉詣あり。拜す。神色少し。斐り。眞
 脚髮鬚漸く。小長く。伸させ。多奇特なり。斯て。宝海大僧都。定り
 む。趣を。朝廷(奏)聞あり。帝(仁)明も。上皇(淳)和も。御悼。大方。を。恐
 多も。帝(是)は。政事(と)廢。の。三。日。及。ひ。は。廿五日。勅使。を。以て。御賀
 裳座具。如意。香炉。水瓶。湯器。等。贈り。給り。上皇。より。院使。を。之の。以。辰。輪
 の。御吊書。并。種々の。御贈物。有。り。天下。の。人民。空。師。御。入。定。あり。傳。貴。と
 かく。賤。を。悼。惜。ご。ま。り。後。年。文。德。天皇。の。吞。吞。一。年。十月。十七日。大。僧。正。の。官。と
 贈り。の。ひ。又。貞。觀。六年。二月。十六日。法。印。大。和。尚。の。叙。の。醍。醐。天皇。の。延。喜。二十
 一。年。十月。廿七日。弘。法。大師。と。謚。を。賜。り。り。多。る。絳。本。朝。無。双。の。名。僧。也。未。世。の。今。中
 扶。業。皇。統。後。編。卷。之。三。畢
 追。御。利益。端。的。なる。事。も。中。跡。

名古屋 大曾根 矢野平兵衛藏版之内繪本書目

| | | | | | | |
|--------------|-------|----------|--------|------|--------|--------|
| 繪本中山草紙 | 一冊 | 秋葉 鳳来寺 | 一九の紀行 | 二冊 | 繪本草紙大全 | 一冊 |
| 繪本景清草紙 | 一冊 | 佐倉宗五郎實説 | 道歌百人一首 | 一冊 | | |
| 繪本對權草紙 | 一冊 | 梅川忠兵衛實説 | 繪本手遊 | 十冊 | | |
| 繪本尾梅 三郎草紙 | 一冊 | 本保彦左衛門實説 | 繪本あそび | 一冊 | | |
| 冬楓夕の夕栄 | 三冊 | 宇都宮鈞天弁實説 | 繪入都々逸 | 五冊 | | |
| 近世七小町 | 三冊 | 伊賀越仇討實説 | 繪本庭訓集 | 一冊 | | |
| 明治天一坊 | 二冊 | 萬 | 歳 | 一冊 | 柳川畫譜 | 三冊 |
| 繪本西郷一代記 | 二冊 | 繪本桃太郎代記 | 一冊 | 花鳥畫譜 | 一冊 | |
| 名古屋七變人 近 剗 幕 | 繪本 一冊 | 繪本 一冊 | 金文七 | 一冊 | 繪本 一冊 | 太閤記 十冊 |

